

瘀血の病態と治療に関する基礎知識

富山大学 和漢医薬学総合研究所 和漢薬製剤開発部門 教授 谿 忠人

図1 証を考慮する

医療用漢方製剤の「重要な基本的注意」には、「本剤の使用にあたっては患者の証(体質・症状)を考慮して投与すること」という記載がある。このように漢方保険診療では証を考慮して漢方製剤を使い分けることが前提になっている。

証の概要は以下のように定義できる(寺澤教授の定義を一部改変)

患者がその時点で現している症状群を 漢方医療の基本概念で整理し、 病態の特異性を示す症候群などを総合して得られる 漢方医学的診断であり、治療の指示である。	←症状の経過を診る ←陰陽論が基本 ←(効能効果の前文に例示) ←治療薬を選ぶ医療診断
--	--

図2 証の概要【とくに病理の証：陽気(気)と陰液(血)の量と機能の過不足】

証には、陰証(虚証、寒証、裏証)；陽証(実証、熱証、表証)など様々な意味がある。

経過： 陰病期の証；陽病期の証
 病性： 陰証(寒証)；陽証(熱証) 【←温熱薬；寒涼薬の使用指針】
 病理(反応性)：陰証(虚証)；陽証(実証) 【←補薬；瀉・消薬の使用指針】

病理の虚証と実証(用いる生薬を指示する診断)

赤字：熱証用生薬 青字：寒証用生薬

虚証(正気の量と機能不足)		実証(病邪の過剰・停滞)	
気	気虚	脾胃気虚証→人参、黄耆、白朮 腎陽虚証→附子、桂皮	肝気鬱結証→柴胡、香附子、川芎 脾胃気滯証→枳実、陳皮
	血虚	肝血虚証→当帰、芍薬 心血虚証→竜眼肉、酸棗仁 肝陰虚証→熟地黄、阿膠	肝瘀血証→牡丹皮、大黃、桃仁 →牛膝、川芎、紅花
血		水滯	脾胃痰飲証→半夏、陳皮 腎水滯証→沢瀉、猪苓、茯苓

図3 血瘀証(瘀血証)：血の循環の失調と停滞(活血薬を指示する診断)

血瘀証(血の運行が停滞し臓腑の機能が失調した実証の病態：瘀血に同じ)

肝瘀血証(胸苦しい、呼吸困難、咳嗽、喘息)

熱証←大黃(逐瘀通経)、牡丹皮(活血化瘀)
 ←桃仁(活血化瘀)、牛膝(逐瘀通経)
 寒証←川芎(活血行気)、当帰(補血活血)
 紅花(活血通経、散瘀止痛)

桃核承気湯、大黃牡丹皮湯、通導散
 桂枝茯苓丸、加味逍遙散、疎経活血湯
 当帰芍薬散、芍帰調血飲、温経湯

◎血瘀は肝気鬱結証(イライラ、憂鬱、腹部膨満感)と併発するので理気薬も併用する

理気薬

枳実、厚朴、陳皮	→通導散	(冷えのぼせ、頭痛、便秘)
柴胡、芍薬	→加味逍遙散	(ヒステリック症状、情緒不安定、気うつ)
香附子、川芎、木香	→女神散	(産前産後の神経症、動悸、不安)
香附子、川芎、烏薬	→芍帰調血飲	(産後の精神不安定、気うつ)

1. 証を考慮する(図1)

証を考慮する意味 時間治療の考えや、個別医療の推進に有用である。
病名の特定し難い症候群においても適切に対処できる。

炎症性疾患：感冒や皮膚病などは病期(陽病期、陰病期)を診ることで適切に対処できる。

機能性疾患：錯雑病理(気滞、瘀血；気虚、血虚など)を診ることで適切に対処できる。

虚弱状態：病理の虚証(気虚、血虚)と病性(寒証)を診ることで適切に対処できる。

中医学の加味逍遙散証：気滞証(肝気鬱結証)や瘀血証という病理の実証と、血虚証という病理の虚証の錯雑した病態を意味しています。これが理気薬の柴胡、活血化瘀薬の**牡丹皮**および補血薬の当帰を含む加味逍遙散を選ぶ病理診断です。

日本漢方の加味逍遙散証

医療用加味逍遙散製剤の効能効果の前文にある「体質虚弱な婦人で肩がこり・・・精神不安などの精神神経症状・・・」という記載(しぼり)が加味逍遙散の「特異性を示す症候群」の例です。

加味逍遙散証は加味逍遙散を投与すれば奏効することが予想される体質や体調を意味しています。投与前に good responder を選別しその時点の「治療の指示」を得ることです。

2. 証の概要：とくに病理の証(図2)

病理の証と生薬の薬能：証は生薬を選ぶ指針です。瘀血証は活血化瘀薬を用いる指示です。この活血化瘀を薬能といいます。

病理の証：中医学では病理の証(虚証と実証)が重視されます。虚証と実証が併存する虚実錯雑(夾雑)の病態が多いのです。

病理の実証：病邪や病理産物の過剰な病態で、瀉下法や消法(理気・活血・利水・化痰)を用いる指針です。

病理の虚証：正気(抗病力)の不足した病態で、補養法(補気・補陽；補血・補陰)を用いる指針です。

診断の証

治療薬を選ぶ証診断の過程における舌証や脈証(日本漢方では腹証)にも証という字が用いられます(所見の証)。

日本漢方の実証

闘病反応の強い病態を実証とします。「体力がある人」のように説明されます(腹診の所見が重視されます)。

日本漢方の虚証

闘病反応の弱い病態を虚証とします。加味逍遙散には「体質虚弱な婦人」に用いる指示があり、これが日本漢方の体力・反応性の虚証を意味しています。

中医学は病理の虚実・病性の寒熱と生薬の薬能を連携させる「生薬単位」の体系です。(日本漢方でも、柴胡の証、人参の証のように使用する薬物を指示する用法もあります。)

日本漢方は体力の虚実と処方の特異性を示す症候群を連携させる「処方単位」の体系です。

3. 血瘀証：血瘀と気滞、気虚・血虚の併発(図3)

血瘀とその他の病理：血瘀の誘因には図3の気滞の他に気虚と血虚もあります。

温経湯は補気薬(人参、甘草)と補血薬(当帰、川芎)と活血薬(**牡丹皮**)を含みます。(血虚による皮膚や唇の乾燥、掌のほてり感を目標にします)

当帰芍薬散は補気薬(白朮、茯苓)と補血薬(当帰、川芎)と利水薬(**沢瀉**、茯苓、白朮)を含みます。(水滞に基づくむくみを目標にする点で四物湯と相違します)

芍帰調血飲は補気薬(白朮、茯苓、甘草)と補血薬(当帰、熟地黄)と理気薬(香附子、烏薬、陳皮)と活血薬(**牡丹皮**)を含み、産後精神不安などに適した処方です。

血の道症

日本の江戸時代に月経不順、月経痛と精神神経症状や自律神経失調症状を伴う婦人更年期症状を意味した漢方用語です。瘀血や血虚の病理を意味していました。

瘀血の診断(スコア40点以上：寺澤教授基準)

10点(男・女)：眼輪部の色素沈着、舌の暗赤紫化、
臍傍圧痛抵抗(右)

10点(男)：歯肉の暗赤化、痔疾

10点(女)：月経障害

5点(男・女)：細絡(毛細血管の拡張、くも状血管腫)、
臍傍圧痛抵抗(左)、臍傍圧痛抵抗(正中)、
S状部圧痛抵抗、季肋部圧痛抵抗

図4 瘀血の関連する病名症候

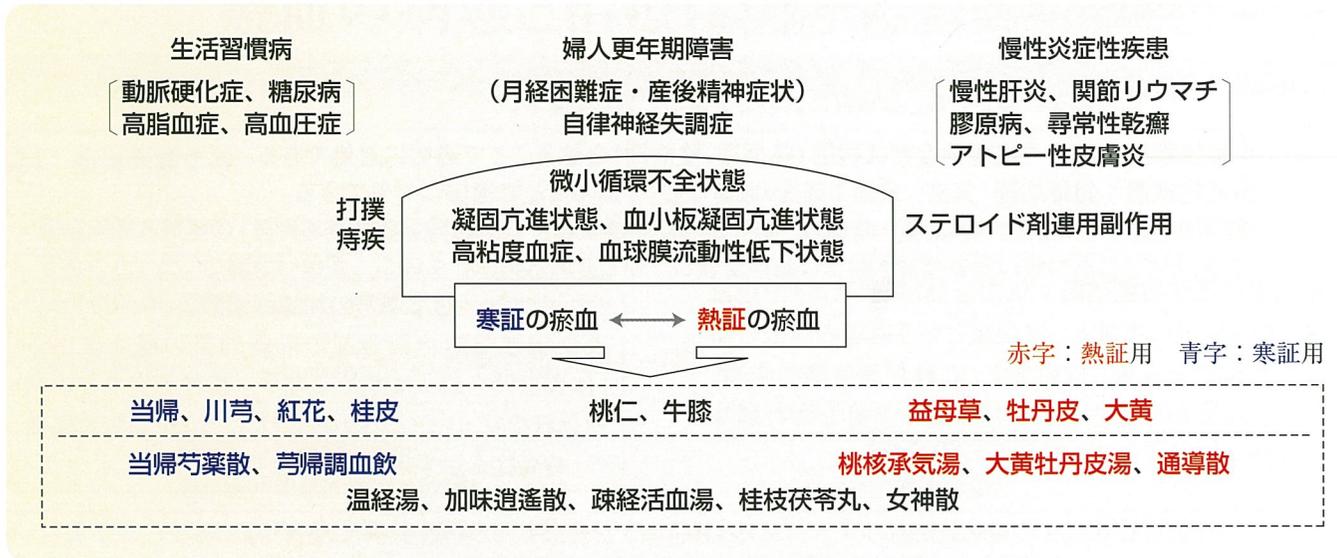


図5 瘀血の治療剤(駆瘀血剤、活血剤)

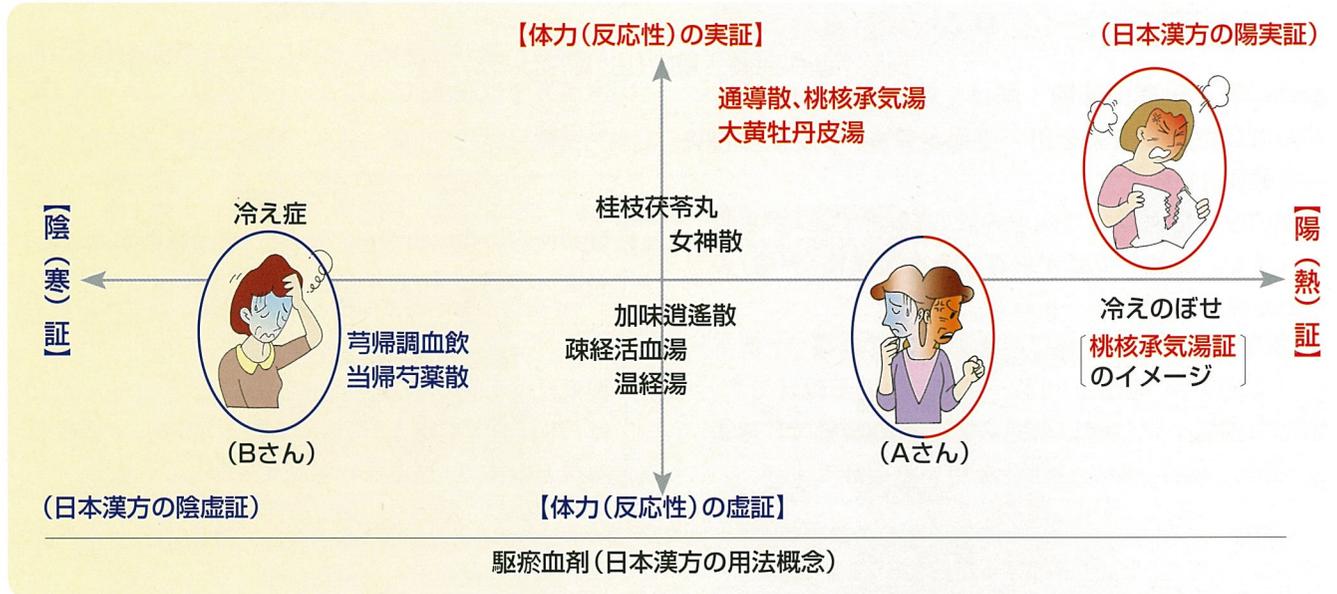
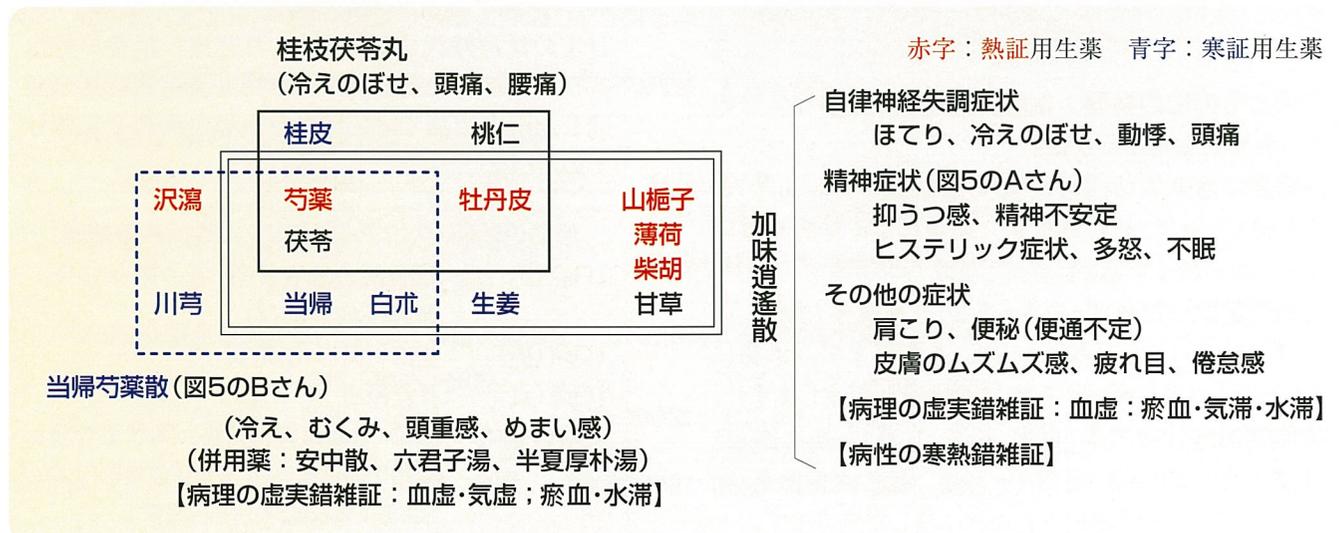


図6 桂枝茯苓丸・加味逍遙散・当帰芍薬散



4. 瘀血の関連する病名症候(図4)

瘀血の原因：精神ストレス、慢性炎症、飽食；寒冷刺激、打撲、外傷（外科手術）、ステロイド剤連用

瘀血：微小循環障害に相当します。現代の各種疾患・症候の経過中の「ある時点」に認められます。

生活習慣病は瘀血：生活習慣病に伴う高脂血症は瘀血に相当します。桂枝茯苓丸が予防する基準処方になります。糖尿病が高粘度血症（瘀血）であることが西洋医学的に明らかにされています。

ステロイド瘀血：ステロイド剤で誘発された凝固亢進状態は瘀血に相当し、桂枝茯苓丸を用いる対象になります。なおステロイド剤連用による免疫抑制（易感染性）状態は気虚（腎虚）証に相当します（このように証は変動するのです）。

急性瘀血(打撲症)に大黃剤

打撲時の内出血が急性の瘀血です。**桃核承気湯**に類する処方を用いる例が『金匱要略』に示されています。打撲直後の興奮状態には**三黄瀉心湯**も頓用されます。

痔疾も瘀血

痔疾は静脈鬱血ですから瘀血です。基本は乙字湯と桂枝茯苓丸の併用です。**熱証**の出血傾向時には**黄連解毒湯**、**寒証**には**芍帰膠艾湯**を用います。

なお脱肛は気虚（下陷）証なので補気薬と柴胡－升麻を含む補中益気湯を用います。

5. 瘀血証に用いる処方と症候(図5)

	冷え症	貧血傾向	浮腫傾向	神経症	便秘	冷えのぼせ	高血圧傾向
桃核承気湯				○	◎	◎	◎
通導散				◎	◎	◎	◎
桂枝茯苓丸				○		◎	○
加味逍遙散	○	○		◎	○	◎	
温経湯	○	◎		○	○	○	
当帰芍薬散	◎	◎	○				
芍帰調血飲	◎	◎		○			

青粋の処方と併用：安中散（胃腸虚弱状態の腹痛や生理痛に併用される）
六君子湯（胃腸虚弱状態の嘔気、上腹部停滞に併用される）

3. 桂枝茯苓丸、加味逍遙散、当帰芍薬散(図6)

桂枝茯苓丸：瘀血（とくに腹腔内の鬱血）に用いる活血化瘀の基本処方です。婦人科疾患だけでなく、男性の生活習慣病にも用いられます（図4）。

加味逍遙散：気滞血瘀（ヒステリックな情緒不安定）と火旺（多怒、hot flash）および血虚や気虚に用いる疎肝解鬱（理気）、清熱涼血、健脾補血、利水の調経剤です。のぼせには**黄連解毒湯**を併用、乾燥皮膚症状には四物湯と併用されます。

当帰芍薬散：瘀血（気虚と血虚：冷え症）および水滯（頭重感やめまい感）に用いる「補血活血・健脾利水」の調経止痛剤です。日本漢方では陰虚証用とされますが、中医学的には水滯という病理の実証を錯雑しています。生理痛には安中散などと併用されます。

桂枝茯苓丸

「体格はしっかりしていて赤ら顔が多く、腹部は充実し下腹部に抵抗のある」更年期障害などに用います。

加味逍遙散

「体質虚弱な婦人で肩がこり疲れやすく、精神不安などの精神神経症状のある」更年期障害などに用います。

温経湯

「(比較的体力が低下した冷え症の人で)手足がほてり、唇のかわくもの」更年期障害などに用います。

当帰芍薬散

「筋肉が軟弱で疲労しやすく、腰脚の冷えやすいもの」更年期障害などに用います。冷え症で貧血傾向と軽度の浮腫を呈する場合に用います。